

色紙に書く 座右の銘

大竹利典



てんしんしようのころ
「天真正意」

すなわちへいほうなり
「則平法也」



大竹 利典（おおたけ りすけ）
千葉県無形文化財・天真正伝香取神道流師範。
大正15年千葉県成田市生まれ。昭和17年16歳の折、天真正伝香取神道流に入門。当時の師範は林彌左エ門先生。20年6月陸軍に入隊、同8月帰郷。35年無形文化財保持者、54年文化庁長官より銃砲刀剣類登録審査員を拝命する。平成17年春旭日双光章受章。

天真正伝香取神道流の巻物には、目録、免許、極意皆伝の三巻があります。入門書に血判を押して師の下で修業に入り、四年ないし五年間くらい稽古して初めて目録を許され、さらに稽古を続けて免許となり、極意は技がいくら良くても四十二歳以上にならないと許されないことになっています。目録の巻頭書に「抑 兵法者儒者道之根元也。故に平法は深し。男子爲る者平法を知らず。故に平法は深し。男子爲る者平法を知らず。太刀を抜不人に勝こと神道流の建立也」とあります。香取神道流

の流祖、飯篠長威斎家直公は「熊笹の教へ」という教えを残しています。他流試合を申し込まれたら先ず自分が熊笹の上にゴザを敷き、その上に座して「さあどうぞ」と誘う。「もし私のように座れたら、木剣にて立ち合いましよう」と。相手はそれに座れず、戦う意欲を失って引き下がったという。「敵に勝つ者を上とし敵を打つ者はこれに次ぐ」——戦わずして目的を達成する者を、真の勝者なりと教えています。世界のどこの民族にも己を守り郷土を護

るための格闘技というものがありませんが、武術は終始一貫して一撃必殺の稽古に励みます。負けても良いとの格闘技などあるはずはないのです。強靱な精神力も同時に求められます。しかし、その強さを表に現したなら、暴力になってしまいます。武士道とは犠牲的精神の発揚を源泉とするもので、武道を修業する者は、謙譲の精神がなければなりません。昔から強さばかりを好む輩が争いによって、あたり尊い命を絶つばかりか、道統の尽きてしまった例は枚挙に暇

がありません。

香取神道流は六世紀もの永い間全くいつてよいほど、講談や小説の元になるような争い事のなかったのも不思議であります。戦場で討ち死にをした鹿島の松本備前守など、門外に去った人物は別として。

流祖は、長男はいかなる良い条件をもつてしても仕えることを禁じています。以て、

剣を以て仕える以上、上意討ちの命令で人を斬らなければならぬし、世の罪のない者を斬ることはできず、不忠、不義など進退極まることになるので、仕官を禁じているのです。

技量も精神力も人の上に立つて初めて戦^{なかわず}不^なして勝つことができます。「熊笹の対座」——ただ一言ではありませんが、これは容

天真正意
則平法也

健之



易ならざる教えで、人間としての資格を得るための修業とは、精神的にみて「千人の敵に勝つよりも己一人に勝つことの方が至難である」とさえいわれています。一度この世に生を享けたものは、植物でも動物でも子孫を遺すことにおいては、寒暑も厭^{いと}わず艱難^{かんなん}辛^{しん}苦^くすることはご承知のとおりです。家直公は家庭を形成し、子孫の正しい繁栄を祈り、流祖自らは人生において臆^{おそ}することなく、恙^{つつが}なく百二歳の生涯を全うしております。修業という名目のために人間のなものを犠牲にしたならば、流祖の生家の繁栄も、香取の二十代にわたる子孫の安泰も、恐らくなかったでありましょう。あの戦国の世を経て五百数十年後の今日まで、連綿として続いてきた事實は、まさに永遠の道であり、流祖の平^{たいら}な法^はという偉大なる教えの所以^{ゆえん}であるとしか例えようがありません。

私も現在八十歳になりましたが、この平法を守り、流祖家直公に一步でも近づけま^すすように、剣を以て仕えることに生涯を懸けています。